小林純教授の略歴および業績

1950年５月17日生

学　歴

1969年３月　新潟県立高田高等学校卒業
1969年４月　東京都立大学経済学部経済学科入学
1973年３月　東京都立大学経済学部経済学科卒業
1973年４月　立教大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程入学
1975年３月　立教大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程修了
1975年４月　立教大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程入学
1976年10月　休学（立教大学学生国際交流制度にて西独テュービンゲン大学留学）
1977年９月　復学
1981年４月　立教大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程単位取得退学

学　位

1975年３月　経済学修士（立教大学）

職　歴

1979年４月　立教大学経済学部助手（～1982年３月）
1982年４月　高千穂商科大学商学部専任講師
1985年４月　高千穂商科大学商学部助教授（～1990年３月）
1990年４月　立教大学経済学部経済学科助教授
2000年４月　立教大学経済学部経済学科教授（～2016年３月）
（在外研究）
2005年４月　ヴィーン労働者運動史協会訪問研究員（～2006年３月）
2012年10月　グラーツ大学シュンペーター・センター訪問研究員（～2012年10月31日）

学内職務

2002年４月　ランゲージセンター長（～2004年３月）
2004年４月　全学共通カリキュラム運営センター言語部会長（～2005年３月）
2006年４月　全学共通カリキュラム運営センター言語部会長（～2007年３月）
2007年４月　経済学部長（～2009年３月）
2007年７月　立教学院評議員（～2010年６月）
2009年４月　人権・ハラスメント対策センター副センター長（～2012年３月）
2013年４月　日本語教育センター副センター長（～2015年３月）

兼任（非常勤）講師

1980年10月　横浜国立大学経済学部（社会科学概論，1981年３月まで）
1984年４月　立教大学経済学部（社会思想史（通年），演習（後期），1985年３月まで）
1987年４月　横浜国立大学経済学部（社会科学概論，1988年３月まで）
1991年４月　横浜市立大学商学部（世界史概説，1995年３月まで。外国書研究 II（独語），1998年３月まで）
1992年４月　横浜市立大学大学院経済学研究科（原典講読 I （独語），1998年３月まで）
1994年２月　東京都立大学経済学部（社会思想史特講，集中講義：1994年３月まで）
1995年４月　横浜市立大学国際文化学部（社会史概論 A，1998年３月まで）
1995年12月　東京都立大学経済学部（社会思想史特講，集中講義：12月まで）
1997年４月　福島大学経済学部（経済学特講，集中講義：1997年９月まで）
1997年９月　東京都立大学経済学部（社会思想史，1998年３月まで）
1998年４月　東京都立大学経済学部（社会思想史，前期集中：1998年９月まで）
2001年４月　横浜市立大学大学院経済学研究科（経済学特殊問題研究，2002年３月まで）
2003年４月　横浜国立大学経営学部（社会科学概論，2004年３月まで）
2006年４月　横浜市立大学商学部（社会史概論 A，ドイツ学特論，2007年３月まで）
2009年４月　東京女子大学文理学部（前期：経済史，後期：経済学史、2010年３月まで）
2015年10月　放送大学教養学部（面接授業：「営利と倫理：スミスとヴェーバー」，継続中）
2016年４月　立教大学経済学部（ゼミナール B，2017年３月まで）

業績一覧

単　著

1．『マックス・ヴェーバーの政治と経済』白桃書房，1990.02，A５/251P.
2．『ヴェーバー経済社会学への接近』日本経済評論社，2010.02，A５/273P.
3．『研究室のたばこ―経済思想史の周辺で』唯学書房，2011.01，B６/273P.
4．『ドイツ経済思想史論集Ⅰ』唯学書房，2012.05，B６/286P.
5．『ドイツ経済思想史論集Ⅱ』唯学書房，2012.10，B６/302P.
6．『マックス・ヴェーバー講義』唯学書房，2015.01，B６/380P.
7．『ドイツ経済思想史論集Ⅲ』唯学書房，2015.09，B６/316P.
8．『続ヴェーバー講義 政治経済篇』唯学書房，2016.12，B６/360P.

共編著

1．福井守・八木沢秀記・小林純編『スポーツとその周辺』高千穂商科大学総合科目研究会，1985.10.　執筆部分「遊びとスポーツ」pp. 108–125.
2．住谷一彦・田村信一・小林純編『ドイツ国民経済の史的研究―フリードリヒ・リストからマックス・ヴェーバーへ―』御茶の水書房，1985.11.　執筆部分「ワルター・ロッツの経済政策観」pp. 123–149.
3．田中豊治・柳沢治・小林純・松野尾裕編『近代世界の変容―ヴェーバー・ドイツ・日本―』リブロポート，1991.9.　執筆部分「経済統合の系譜―ナウマン『中欧』論によせて―」pp. 89–111.
4．宇都宮京子・小林純・中野敏男・水林彪編『マックス・ヴェーバー研究の現在』創文社，(2016.11.) 執筆部分「資本の増殖欲求と労働」 pp. 39–71.

共著（分担執筆）

1．住谷一彦・小林純・山田正範『マックス=ヴェーバー　人と思想』清水書院，1987. 3.　執筆部分「II　ヴェーバーとドイツ帝国」pp. 77–161. (新装版［一部改訂］, 2015.11.)
2．大田一廣・鈴木信雄・高哲男・八木紀一郎編『経済思想史―社会認識の諸類型―』名古屋大学出版会，1995.4.　執筆部分「カール・クニース―ドイツ歴史学派の倫理的経済思想―」pp. 124–137. (一部改訂のうえ，同編『新版経済思想史』2006.9, pp. 126–139 に収録)
3．八木紀一郎・住谷一彦編『歴史学派の世界』日本経済評論社，1998.1.　執筆部分「エミール・レーデラーの位置をめぐって」pp. 253–278.
4．老川慶喜・小笠原茂・中島俊克編『経済史』東京堂出版，1998.2.　執筆部分「第６

章　帝国主義の時代」pp. 107–124,「資本主義の精神」pp. 56–61,「貧困」pp. 125–130.

５．住谷一彦・和田強編『歴史への視線』日本経済評論社，1998.10．執筆部分「ヴィーンのオットー・ノイラート―1920年代の実践活動―」pp. 271–298.

６．Shionoya, Y. ed. *The German Historical School*, London: Routledge 2001.1. 執筆部分 ‘Karl Knies's Conception of Political Economy: The Logical Status of Analogie and Sitte’, pp. 54–71.

７．八木紀一郎編『経済思想７　経済思想のドイツ的伝統』日本経済評論社，2006.2. 執筆部分「M.ヴェーバー―宗教と経済―」pp. 199–262.

８．Hagemann, H., Nishizawa, T., Ikeda, Y. eds. *Austrian Economics in Tradition: From Carl Menger to Friedrich Hayek*, London: Palgrave Macmillan, 2010.5. 執筆部分 ‘Discoursing Freedom: Weber’s Project’, pp. 41–61.

論文等（単著論稿）

１．研究ノート：シャハトの「新計画」―統計にみる戦前ナチス期の貿易構成―，『立教経済学論叢』12号，1978.2: 117–129.

２．研究ノート：ヴェーバー・ノート―『科学論』覚書―（正）（続），『立教経済学論叢』13号，1978.12: 75–88; 14号，1979.2: 71–78.

３．マックス・ヴェーバーのドイツ第二帝政社会批判（１）（２）（３），『立教経済学研究』34巻１号，1980.6: 153–171; 34巻２号，1980.9: 173–201; 34巻３号，1980.12: 361–386.

４．ドイツ機械制綿工業における労働力の編成と選択について―M・ベルナイスの社会政策学会調査報告（1910年）―，『立教経済学研究』35巻３号，1981.12: 237–265.

５．ドイツ近代史における知識人エリート，『高千穂論叢』昭和57年度（２），1983.5: 459–502.

６．ヴェーバー理念型ノート，『高千穂論叢』昭和62年度（１），1987.8: 231–249.

７．ドイツ銀調査委員会と W・ロッツ，『高千穂論叢』昭和62年度（２），1987.12: 25–61.

８．「職業としての学問」によせて，『情況』1993年６月号，情況出版，1993.6: 58–70.

９．不確実性，秩序，倫理―最近のドイツ経済学史の研究から―，『季刊経済と社会』48，時潮社，1997.2: 89–98.

10．大塚久雄と戦後の「近代」意識，『神奈川大学評論』26，1997.3: 83–90.

11．社会化と労働者運動―1920年代ヴィーンのノイラート―，『立教経済学研究』52巻３号，1999.1: １–22.

12．クニース経済学におけるアナロギーとジッテの位置価，『立教経済学研究』53巻１号，1999.7: 55–69.

13．1920年代ヴィーンの住宅建設―ノヴィーとノイラート―，『立教経済学研究』54巻３号，

2001.1: 99–128.

14．マックス・ヴェーバー研究の現在，『経済学史学会年報』40号，2001.11: １–12.

15．マックス・ヴェーバーの GdS 編纂，『立教経済学研究』56巻１号，2002.6: 179–211.

16．ヴェーバー経済社会学の若干の考察，『立教経済学研究』58巻４号，2005.3: 75–97.

17．ヴィーン住宅建設史のひとこま（上）（中）（下），『社会主義』517号，2005.10: 98–103; 518号，2005.11: 101–106; 520号，2005.12: 64–69.

18．幸福学者ノイラート―知識と実践―，『立教経済学研究』60巻４号，2007.3: 29–52.

19．自由のプロジェクト―ヴェーバー経済社会学の見方―，『現代思想　総特集マックス・ウェーバー』11月臨時増刊（35巻15号），青土社，2007.11: 190–206.

20．19世紀ドイツの経済学観―シェーンベルク版ハンドブックをめぐって―，『立教経済学研究』65巻２号，2011.11: 109–138.

21．二つの「工業労働者問題」項目―シェーンベルク版ハンドブックをめぐって―，『立教経済学研究』65巻３号，2012.1: 75–97.

22．ドイツの「中欧」構想―経済思想史の視点から―，『思想』岩波書店，2012年４月号：53–72.

23．新自由主義について，『立教経済学研究』66巻１号，2012.7: 29–61.

24．ヴェーバーの音楽研究について―テクストをめぐる諸事情―，『立教経済学研究』67巻１号，2013.7: 45–75.

25．ドイツ語圏における経済学史叙述の展開―経済学史成立の背景，『経済学史研究』56巻１号，2014.7: 21–46.

26．研究ノート：ノイラート研究の新たな展開―桑田学著『経済的思考の転回』によせて―，『立教経済学研究』68巻４号，2015.03: 135–154.

27．研究ノート：社会思想とマックス・ヴェーバー研究，『立教経済学研究』69巻４号，2016. 02: 195–203.

翻　訳

１．アブラモフスキー「古典古代の都市と中世の都市」，『立教経済学論叢』７号，1973.9: 149–173.

２．ユルゲン・コッカ『マックス・ヴェーバー―西ドイツの研究動向―』未來社，1979.9, 82P.（共訳書，共訳者：住谷一彦．1994年『[新版] ヴェーバー論争』と改題）

３．トレルチ「ストア的＝キリスト教的自然法と近代的世俗的自然法」，『トレルチ著作集第７巻　キリスト教と社会思想』ヨルダン社，1981.5: 237–272.（住谷一彦と共訳）

４．ヴェーバー「トレルチ報告に関する討議発言（第一回ドイツ社会学会）」，『立教経済学論叢』20号，1982.1: 73–85.

５．デーヴィド・ビーサム『マックス・ヴェーバーと近代政治理論』未來社，1988.11，429Ｐ（共訳書，共訳者：住谷一彦）
６．テンブルック「マックス・ヴェーバーの宗教社会学―過去と現在―」，『聖学院大学総合研究所紀要』第２号，1991.12: 74-98.
７．アイゼンシュタット『文明形成の比較社会学』未來社，1991.7，366P.（共訳書，共訳者：梅津順一，田中豊治，柳父圀近）
８．ヴォルフガンク・モムゼン『マックス・ヴェーバーとドイツ政治 1890～1920　II』未來社，1994.7，449P.（共訳書，共訳者：安世舟，五十嵐一郎，牧野雅彦）
９．テンブルック「マックス・ヴェーバーとエードゥアルト・マイアー」，モムゼン他編『マックス・ヴェーバーとその同時代群像』鈴木・米沢・嘉目監訳，ミネルヴァ書房，1994.9: 237-279.
10．テンブルック『マックス・ヴェーバーの業績』未來社，1997.5，245P.（共訳書，共訳者：住谷一彦，山田正範）
11．キース・トライブ「ポリティカル・エコノミーの歴史主義化」，住谷一彦・八木紀一郎編『歴史学派の世界』日本経済評論社，1998.1: 171-192.
12．キース・トライブ『経済秩序のストラテジー』ミネルヴァ書房，1998.10，346P.（共訳書，共訳者：手塚真，枡田大知彦）
13．ヨアヒム・マッテス「社会史か世界史か？」，鈴木・山本・茨木編『歴史社会学とマックス・ヴェーバー（下）』理想社，2003.2: 211-234.
14．ヘルマン・シューマッハー「マックス・ヴェーバー」，『立教経済学研究』57巻３号，2004.1: 161-186.
15．カール・アッハム「ドイツ語圏社会学の初期の活動の場としてのヴィーンとグラーツ」，茨木竹二編『ドイツ社会学とマックス・ヴェーバー』時潮社，2012,10: 29-59.

書　評

１．上山安敏『ウェーバーとその社会』，『社会科学の方法』御茶の水書房，118号，1979.4: ７-9.
２．田村信一『ドイツ経済政策思想史』，『歴史学研究』青木書店，561号，1986.11: 66-71.
３．ブロイアー『規律の進化』，『社会経済史学』53-2，1987.6: 127-130.
４．小林昇・杉山忠平『西洋から西欧へ』，『週刊読書人』1988年１月25日号.
５．リハ『ドイツ政治経済学』，『経済学史学会年報』（JSHET）31，1993.11: 163.
６．田村信一『グスタフ・シュモラー研究』，『経済学史学会年報』32，1994.10: 166.
７．鳥越輝昭『ヴェネツィアの光と影―ヨーロッパ意識史のこころみ―』，『神奈川大学評論』19，1994.11: 160.

８．相田慎一『カウツキー研究』,『土地制度史学』147, 1995.4: 68–70.

９．梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済―歴史的研究―』『神奈川大学評論』25, 1996.11: 132–133.

10．松野尾裕『田口卯吉と経済学協会』,『土地制度史学』158, 1998.1: 67–69.

11．山田高生『ドイツ社会政策史研究』,『土地制度史学』163, 1999.4: 66–68.

12．Wolfgang Schwentker, *Max Weber in Japan*,『三田学会雑誌』92–1, 1999.4: 236–239.

13．コールバーグ『マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学』,『週間読書人』1999年10月22日号.

14．長部日出夫『二十世紀を見通した男―マックス・ヴェーバー物語―』, 時事通信社, 2000年７月. (諸地方紙に配信)

15．橋本＋橋本＋矢野（編）『マックス・ヴェーバーの新世紀』,『週間読書人』2001年３月９日号.

16．山之内靖『日本の社会科学とヴェーバー体験』,『土地制度史学』174, 2002.1: 48–50.

17．マックス・ヴェーバー関連書４冊,『週間読書人』2004年２月27日号.

18．尾近・橋本編『オーストリア学派の経済学―体系的序説―』,『社会経済史学』69–6, 2004.3: 111–113.

19．Erik Grimmer–Solem, *The Rise of Historical Economics and Social Reform in Germany 1864–1894*,『経済学史学会年報』46, 2004.12: 127–129.

20．柳澤治『資本主義史の連続と断絶―西欧的発展とドイツ』,『経済学史研究』(JSHET) 49–2, 2007.12: 92–93.

21．井上琢智『黎明期日本の経済思想―イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化―』,『大学史研究』23, 2008.10: 128–133.

22．E. Nemeth, S. W. Schmitz, T. Uebel eds., *Otto Neurath's Economics in Context*,『経済学史研究』51–1, 2009.7: 107–108.

23．藤本建夫『ドイツ自由主義経済学の生誕―レプケと第三の途』,『経済学史研究』51–2, 2010.1: 132–133.

24．桑田学『経済的思考の展開―世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』,『経済学史研究』57–2, 2016.1: 132–133.

その他

１．その他)「エミール・レーデラーのこと」,『創文』創文社, 244号, 1984.5: １–4.

２．事典項目)「経済社会学」「古代国家」他,『社会学事典』弘文堂, 1988.2.

３．資料)「マックス・ヴェーバー伝の改訂（正）(続)」,『高千穂論叢』23巻３号, 1989.3:

197-247; 24巻１号，1989.6: 135-178.

４．その他)「住谷一彦先生の人と学問」，『立教経済学研究』44巻３号，1991.1: 191-203.

５．事典項目)「家共産制」，比較家族史学会編『事典・家族』弘文堂，1996.2.

６．辞典項目)「マックス・ヴェーバー」「クニース」他，経済学史学会編『経済思想史辞典』丸善，2000.6.

７．コメント) Some comments on K. Tribe's report, in: *International Symposium. Carl Menger and the Historical Aspects of Liberalism* (18-19. Dec. 2004), 2006: 65-68.

８．その他)「故高橋和男氏の人と学問」，『立教経済学研究』61巻２号，2007.10: 287-302.

９．その他)「大塚勇一郎教授記念号によせて」，『立教経済学研究』62巻２号，2008.10: i-ii.

10．その他)「小松善雄教授記念号によせて」，『立教経済学研究』62巻４号，2009.3: i-ii.

11．資料紹介)「オットー・ノイラート」，『立教経済学研究』64巻４号，2011.3: 63-91.

12．その他)「マックス・ヴェーバー」(温経知世 Vol. 60)，『エコノミスト』毎日新聞社，2012.12.11: 48-49.

13．資料紹介)「ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター『思想家カール・マルクス』」，『立教経済学研究』66巻３号，2013.1: 189-197.

14．講演要旨)「図書館利用者の感想」(シンポジウム「ドイツの公共図書館思想」2012.12.02)，*St. Paul's Librarian*, No. 27 (2012)，2013.5: 57-60.

15．その他)「資本主義とプロテスタンティズム」，『エコノミスト』毎日新聞社，2013.10.22: 28-29.

16．その他)「ヴェーバーとドイツ社会政策学会」，『立教経済学論叢』82号，2016.3: 9-19.

17．辞典項目)「研究編：ヴェーバーと社会思想史」，『マックス・ヴェーバー辞典』平凡社(2017年刊行予定)

学会活動

社会経済史学会会員.

政治経済学・経済史学会会員：学会賞選考委員 (2013-14年度).

経済学史学会会員：編集委員 (2006.4～2009.3)，幹事 (2009.4～2011.3).

社会活動

かわさき市民アカデミー：講師 (2015年度後期，現代事情コース「ピケティ著『21世紀の資本』の意味を考える」担当).